

シンポジウム：子どもの心を育む環境とは

心の扉、学校教育の立場から考える

人間総合科学科目教授 佐藤 正昭

近年、子どもたちの問題行動が多発し、しかも私たちの考えを超えるような事件が発生して、教育関係者はもとより多くの人々に深刻な影響を与えています。新聞等のメディアは、最近の子どもたちがどうなっているのか、子どもたちの心に何か変化が出てきているのかなどのことで、識者や教育評論家たちの様々な考えを載せています。

現代の社会において、子どもの教育や心を育てることを担う場は、第一義的には家庭であり、学校でありそして地域社会の大人たちであることは論を待たないでしょう。私は、長い間教育現場（高等学校）と教育行政において仕事をしてきたことから、このことについて学校教育の立場からその現状と思考の一端を述べてみることにしたい。

学校においては、「生徒指導」ということで子どもたちの指導がなされています。この指導は、児童・生徒の発達段階に即して、すべての子どもたちがより良い人格形成を求めているという基本認識に立つものであります。そのような子どもたちを側面から援助、支援する機能が生徒指導であるわけです。この生徒指導の機能が発揮される対象は、すべての子どもたちであり、発揮する主体はすべての教師であり、発揮される場はすべての教育活動にあるわけであります。

このような生徒指導が効果的になされるためには、学校においては①子どもの内面理解を大切にする ②先生たちの協同指導体制を大切にする ③家庭や地域社会との連携を大切にする ということを中心に進めています。

子どもの内面理解といっても容易ではありません。よく問題行動が発生すると、「ごく普通の子、日ごろ変わったことはみられなかった。」などというコメントがありますが、果たしてどうであったのか、子どものだすシグナルを見過ごすことはなかったのかということを考えさせられます。内面理解を深めるためには、教師が子どもと向き合う時間を豊かにし、日常的に信頼関係をつくっておくことが肝要であります。「子どもの心の扉の取っ手は子どもの内にしかない。」ということが言われますが、信頼関係の中で子どもが徐々に心を開くことになるものであると考えます。

先生方の協同指導体制ですが、先生方も考え方、指導観、価値観などは多様であります。しかし、学校として

指導の方針を決めたら、先生方一人一人の個性や持ち味の中で子どもたちの良さやつまずき、悩みなどを受け止める取り組みを進めなければなりません。

家庭や地域社会との連携についてですが、家庭や地域社会の教育力の低下がそれを妨げているということが言われます。それだけにこの3者の連携は大切であります。しかし、何もないところからは連携の機運は生まれるものではありません。まず学校が教育活動を充実させることに努力し、そのことにより生徒や学校が変化すれば家庭や地域社会が学校に目を向けることとなります。そのためには、学校と家庭、地域社会の間で児童・生徒の心を育てることを軸とした情報のボール投げを日常的に行うことが大切であります。

最後に、子どもたちの指導に当たる教師について述べなければなりません。私は今日ほど教師の在り方が問われている時はないと思います。教師は子どもの心を揺さぶる直接の場にいます。常に子どもたちの心に添う教師、自らの在り方を問い続ける教師、人生を語るができる教師など、その中のひとつでも大切にできる教師を求めて努力して欲しいものと考えます。

シンポジウム：子どもの心を育む環境とは

モダニズム、ポストモダニズム、そして生きる力

社会福祉学科教授 入江 良平

「子供の心を育む環境」というテーマの背景には、現代における危機意識が反映されている。日本は、戦後の高度成長を経て物質的な豊かさを達成した。しかし、経済的發展はそのまま人々の幸福をもたらすものではなく、むしろさまざまな社会病理が広がっており、とりわけ子供たちの間で、奇妙で不安な現象や事件が次々に起こっている。このような状況を改善したいという願いの具体的な表現として、「よりよい環境を整えたい。そのためには何をすればよいのか」という問いが提出されるのであろう。

だが、問題を現実的に考えようとするならば、こうした問いそのものに対する反省が必要なのではないか。

その姿勢はモダニズム（近代思想）にもとづいている。モダニズムは世界が合理的秩序にしたがって解明されることを考え、その知識にもとづいて世界を「あるべき姿」へと作りかえる力が人間にあると信じて、この二世紀以上にわたってユートピア建設の努力を続けてきた。しかし、人類の知識と技術が近代において未曾有の発展を実現した現代にいたって、その限界もまた明らかになりつつあ

り、ポストモダニズムと総称される一群の思想によって異議の申し立てがなされている。

ポストモダニズムの主張は、あらゆる点においてモダニズムの対極にある。ポストモダニズムにとって、世界はカオスと偶然に充ち満ちている。人間は全体的システムとしての環境の部分であり、部分は全体をけっして完全には制御できない。また、モダニズムが教育の目標としてかかげた「自立した理性的主体としての自我」は、ポストモダニズムにとって、内面化された権力によって自らを規制する「近代的主体」であり、それは生命の根源からの疎外の様態である、等々。それがモダニズムの影の部分の部分を明らかにしており、後期近代の我々がおかれている現実のある側面を捉えていることは否定できない。

もちろん、ポストモダニズムの主張をそのまま受け入れることはできない。ポストモダニストたちもまた合理性にもとづくテクノロジーによって作りかえられた世界に生きており、現実の彼らはニーチェ・ディオニューソスの秩序的な秩序の溶解、エクスタシーという実現不可能な夢想・憧憬を語るのみである。

モダニズムとポストモダニズムは対立というより、コインの裏表の関係にある。どちらも正しいが、どちらも一面的であり、生の全体を捉えそこなっている。どちらも我々ひとりひとりがいまここで現に生きているという事実を忘れている。ちょうど自らの運動によって解けない微分方程式の解を出してしまう冥王星のように、我々は現に生きることによって現実を創造している。現実は、モダニズムの合理性とポストモダニズムのニーチェ的エクスタシーの加算ではない。両立しえないこの二つの視点の中間に、いわば「生きる力」とも言うべき何かがあるを現す。

問題を探求するとき、その対策を立てるとき、近代に生きる我々は合理主義的な手法に頼らざるをえない。しかし「子供の心を育む環境とは」といった問題と真に具体的かつ現実的に応接するためには、モダニズムの影の側面についての意識、そして「生きる力」へのまなざしが必要だと思われる。

口述 1

老人保健法に基づく機能訓練事業の意義の再検討 －保健師の役割と参加者の自己評価より－

山田 典子¹⁾ 杉山 克己¹⁾ 佐藤 玲子²⁾

1) 青森県立保健大学 2) 東京慈恵会医科大学

キーワード：①機能訓練事業、②社会的交流、③保健師活動

I. はじめに

老人保健法に基づく機能訓練事業は、介護保険法の施行に伴い閉じこもり・孤立などの社会的障害の回復・予防に重点を置くことになった。こうした中で実施自治体の同事業に対する評価要求が高まることとなった。先行研究ではADL面での改善はあまり期待できないが低下予防にはなっているだろうという点と、社会心理的側面での改善効果があるとの報告が多かった。こうした中で、我々は同事業の「評価」そのものだけを狙いとせず、調査プロセスそのものの中で利用者と同事業へ参加することの意味を確認し合い、新しい目標設定に役立つようなものがないかと検討した。また事業に直接関わる保健師にも調査に参加してもらうことによって同事業の意義そのものの再検討を行なうことを試みた。

II. 対象・方法

調査は独自項目により5府県6行政区域の同事業参加者を対象に自記式で行なった。ただし、利用者のADL等のための回答補助も含めて、回答後に保健師らによる聞き取り補足等も行なった。聞き取りに際しては質問者マニュアルを作成し、質問意図の徹底と統一性確保に配慮した。

また、集計後に調査に関わった保健師同士で同事業の意義に関して調査資料・結果をもとに話し合いを行ない再検討を行なった。

III. 調査結果

表1表側にみるような22項目に関して同事業参加当初と現在の自立度を5段階自己評価に回答してもらった。想起法・主観的自己評価であることから5段階の差をとることをせずに参加前後での自己評価に向上・低下または・維持によって±1または0を配点した。

その結果、IADL関連項目（表の第2成分に該当）では向上が2～3割、維持が6～7割となっており、自己評価である点を割り引いても概ね先行研究の結果と矛盾しなかった。また、社会的交流等の項目にかんしても同様の傾向であったが、特に向上率が多かったのは表情が明るくなった（44.0%）、会話が増えた（41.0%）などであり、これも先行研究と矛盾しない。

さらに、こうして得点化した各項目に関して主成分分析による因子分析を行なった。表1にその結果と命名した因子名を示した。各因子間に相関が想定されたので回転にはオブリミン法を用いた。

表にみるように因子負荷量は第1因子と第2因子に集中しているので主にこれらについて検討を行なったが、抽出された因子構造に関しては、関わった保健師らの評価は、実践的にもあまり無理はないということであった。